

私立高校におけるキャリア教育推進の課題

— キャリア教育阻害要因の分析 —

綿 引 隆 (水戸女子高等学校)

文部科学省により2004年(平成16年)に出された「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」の中で、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度を育てる教育」が提言された。公立学校では、文部科学省のキャリア教育推進の施策により、様々な事業や活動が行われてきた。しかし、公立高校でキャリア教育の実践が浸透していくなか、私立高校で組織的な活動が行われているとは言い難い。同様のことが茨城県内の私立高校にもあてはまると考える。本稿では、茨城県内の私立高校のキャリア教育実施の現状を調べ、その阻害要因を探り、私立高校でのキャリア教育推進への一助とすることを目的とする。

キーワード： キャリア教育 私立高校 阻害要因 進学実績 生徒募集 建学精神

1 はじめに

産業構造の変化や雇用システムの変化など社会環境が激変し、高校生の進路指導がますます困難になってきた。そんな状況で、高等学校教育には、一層の確かな学力や豊かな人間性の育成が求められている。しかし、筆者が学習指導・進路指導を行うなかで、学ぶことに意義を見いだせない、生きることに希望が持てない生徒が増えていることが気になる。「大学に合格できないぞ」、「進級できないぞ」とか「校則だから」というような言葉で生徒を奮い立たせることが、まったく意味をなさないと感じている。このような状況を打開するべく、文部科学省は2004年(平成16年)に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」を示し、高校の進路指導におけるキャリア教育の推進を支援してきた。

リクルート(2008)によって実施された「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」に

よると、「自校のキャリア教育は生徒の役に立っているか」の質問に対し、キャリア教育を実施している公立高校の84.5%が「とても役に立っている」あるいは「ある程度役に立っている」と考えており、この結果からキャリア教育のある程度の効果が認められる。約3割が、キャリア教育により「生徒の意欲」「生徒の満足度」が増したと回答している。一方、私立高校では「とても役に立っている」あるいは「ある程度役に立っている」は、76%にとどまっており、公立高校に比べ、8.5ポイント下回っている。さらに、公立高校では、「あまり役に立っていない」あるいは「まったく役に立っていない」が14%に対し、私立高校では20.4%になっている。この数値から、私立学校のキャリア教育の実施は、公立高校に比べると遅れをとっていること、そして実施されたとしてもうまく現場で機能してないことがうかがえる。

また、キャリア教育推進のための活動の一つ

としてインターンシップの実施が考えられるが、国立教育政策研究所の「平成20年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果（概要）」によると、公立高校（全日制・定時制・通信制）でのインターンシップ実施率は、68.2%なのに対し、私立高校（全日制・定時制・通信制）では39.1%にとどまっている。これらの結果をみると、私立高校においてキャリア教育が十分に浸透し、機能的に行われているとは言いがたい。

2 先行研究

私立高校でのキャリア教育推進の課題を考えるにあたり、キャリア教育実践の課題を確認したい。リクルートの「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」（2008）に次のような課題が指摘されている。

- ・ 「キャリア教育」の理念をどれだけ深く理解できているかが問題。
- ・ 「キャリア教育＝就業指導」、「キャリア教育＝資格取得」と考えている教員がいる。
- ・ 「キャリア教育」という目標はあるが、教員全体に浸透していない。
- ・ 推進校に指定されていなければ、キャリア教育は、特に行われていないのではないかと思う。
- ・ 学力向上や進学指導のほうが大事。
- ・ キャリア教育の重要性はどの教員も理解しているが、日々の雑務に追われ、実施が困難である。
- ・ 年々、インターンシップのための負担が増えている。
- ・ 各担任の力量によるところが大きく、教師の研修が必要。
- ・ 生徒の学力向上につながるという期待感もあったが、具体的な結果が得られてはいない。

しかし、このような課題は、私立学校に限られたキャリア教育推進の阻害要因ではない。そこで、本稿では、茨城県内の私立高校を対象とした事例調査（アンケート・インタビュー）を行い、茨城県内の私立高校のキャリア教育実施の現状を確認し、その結果を中心に私立高校におけるキャリア教育推進における阻害要因を分析していきたい。

本調査において、私立高校でのキャリア教育推進の阻害要因として立てた仮説は、以下の3点である。

- ① 私立高校では経営を維持するために、生徒募集活動（入学生の確保）を無視できず、他の私立高校は競合校である。そのため、他校との教育活動の連携がとりにくく、十分な情報交換ができない。
- ② 高校3年間の教育活動の成果の一つとして大学進学実績を上げることは外部への重要なアピール材料であり、そのため受験指導を中心とした進路指導となる。
- ③ 文部科学省等からの強い縛りがなかったり、推進校の指定を受けたり、キャリア教育に対して教員が意識する機会が少ない。

3 研究（分析・考察）

本節では、アンケート調査とインタビュー調査から、私立高校でのキャリア教育推進の阻害要因として立てた3つの仮説を検証していきたい。

3.1 アンケート調査による分析

茨城県教育研修センターは、平成19年に「キャリア教育への取り組みに関する実態調査」を実施した。茨城県内の公立高校と私立高校とのキャリア教育の実施状況を把握する必要があると考え、茨城県教育研修センターの許可を得て、同じ質問項目で茨城県内の全私立高校（22校）にアンケート質問を行った。調査概要としては、

各校の進路指導部または教務部、キャリア教育担当の先生方に2009年12月から1月までの間に主に郵送法で実施した。22校に依頼し、14校から回答を得た。回収率は、64%である。

主な調査結果の特徴を示すと、以下の2点である。

第一に、「キャリア教育が教職員にどの程度共通理解されているか」の質問に対し、県立高校と私立高校とを比較すると、理解されていない割合が私立高校で高いのが目立っている（表1）。校内・外での研修が少なかったり、校内で組織的な運営がされていなかったりすることがうかがえる。

表1 教職員のキャリア教育の共通理解度

	県立		私立	
	校数	割合	校数	割合
十分	3	3%	0	0%
概ね	65	59%	8	62%
少し	35	32%	2	15%
されていない	7	6%	4	31%

実施したアンケート結果より

第二に、キャリア教育の視点からキャリア教育を実施している（計画を含む）教科等についての質問で、道徳、家庭、情報の授業での実施に差がみられた（表2）。例えば、インターンシ

表2 キャリア教育の視点から実施している教科

	県立	私立
	校数	校数
道徳	45	0
特別活動	38	7
総合的な学習の時間	84	10
国語	11	2
地理歴史	7	1
公民	18	1
数学	8	1
理科	8	0
芸術	5	0
家庭	14	0
情報	16	1
保健体育	5	0
外国語	5	2
専門教育に関する各教科	31	1

実施アンケート結果より

ップを実施しても、それが、情報の授業でプレゼンソフトを活用し発表するといった教科の活動と連携されていないことなどが考えられる。

3.2 インタビュー調査による分析

アンケートの分析にもとづき、私立高校におけるキャリア教育の取り組みや課題をさらに掘り下げていく目的で、アンケート調査に協力してくれた7校に2009年12月から1月にかけてインタビュー調査を実施した。手続きとしては、はじめに、インタビュー調査を行う各私立高校の校長に電話で承諾を得た。その後、キャリア教育に関わっている進路指導部や教務部の先生方に、筆者が直接それぞれの先生方の学校に赴き、1時間～2時間のインタビューを行った。インタビューは、主に以下の質問項目に沿って行った。

- ① キャリア教育の取り組み状況
- ② キャリア教育を実施するうえでの課題や阻害要因
- ③ キャリア教育実施における成果（大学進学実績を含む）

今回は、2校の分析を行っていきたい。

A高校

私立高校のキャリア教育では、公立高校と育てる力が異なる。地域の中で公立中学校・高校がキャリア教育を実施しており、保護者からキャリア教育実施の期待が高まり7年前から実施している。A先生は、「自分で大学を決める意識が希薄になっており、高校3年生で進路が揺れる傾向があった。そのため、職業観の育成が必要だと教員も保護者も気付いた。」と語っている。一方で、私立高校にキャリア教育が浸透しない要因として、「キャリア教育≠進学実績であること、研究会等への参加が少ないこと、進学指導には邪魔なものとする教員がいること、目先の結果を期待すること」などをあげて

くれた。

B 高校

4～5年前までの3年間、高校1年生全員に3日間のインターンシップを実施していたが、現在は行われていない。主な実施目的は、「生徒のモチベーションを上げること」と「地域と連携することで学校をアピールする」ということであった。インターンシップを含めたキャリア教育を実施することで、生徒を多面的に見ることができたり、生徒指導と関連づけた指導が行えたり、地域の評判も良くなったなどの成果があった。一方で、B先生は、「効果に対する先生の負担・労力が大きく、生徒募集につながるほどの地域の評価も得られなかった。学校・管理職としては続けていきたいと思っていたので、生徒募集につながっていればインターンシップはなくならなかったと思う。また、文部科学省がインターンシップ実施を促していたが、周りの進学校で実施している学校はあまりなかったので止めてしまった。」と語っている。進路への影響としては、「インターンシップを実施してマイナスになることはないが、他の要因、例えば、学力面で優秀な生徒を獲得する方が、効果が期待できる。」

3.3 考察

今回の事例調査から、以下のことがキャリア教育が私立高校に広がっていかない要因になっていることが明らかになった。

- ・教員の負担・労力に対し、キャリア教育の具体的な結果が見えないところが、進路実績や生徒募集に直接つながらない。
- ・キャリア教育は、学力向上や進学指導と深く関連していることが教員に伝わっていない。
- ・文部科学省等の行政的な縛りが無いため、キャリア教育を理解する基盤が校内や教員間にできにくい。

- ・自校のキャリア教育を開示することは、すなわち教育内容や進路指導の本質を明かすことであり、生徒募集のマイナス要因になるため、私立高校同士の連携を取りにくい。

インタビューを通し、ある先生から「私学人は、“人をつくる”という同じ使命がある。」という力強い言葉をいただいた。各私立高校には、それぞれの建学精神があり、その建学精神をつきつめていくとその学校独自のキャリア教育観が見えてくる。生徒募集の枠を超えた私学でのキャリア教育の発展を期待し、共に“人づくり”に貢献していきたい。

4 終わりに

本稿は茨城県内の私立学校に限定し、事例調査を通して、私立高校におけるキャリア教育推進の阻害要因を明らかにしてきた。

しかし、課題を残している。今回は、7人（7校）の先生方にインタビューをお願いしたが、キャリア教育に関わっている進路指導部や教務部以外の先生方の考えを聞くことにも着目する必要がある。今後、様々な分掌・担当の先生方にもインタビューを行い、さらなる分析を行いたい。

また、茨城県内に限らず、他都府県の私立高校と連携をとることで私学のキャリア教育を拡大の可能性を探りたい。

参考文献

- ・リクルート（2009）高校の進路指導・キャリア教育に関する調査No.25 『Career Guidance』 pp.12-31
- ・国立教育政策研究所（2009）『平成20年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果（概要）』
- ・茨城県教育研修センター教職教育課（2009）「キャリア教育への取組に関する実態調査」の結果と考察
- ・伊藤哲司（2009）『みる・きく・しらべる・かく・かんがえる—対話としての質的研究』